

葉集を読む

松岡 隆子

素に生きて初秋の風を身ほとりに

醍醐喜美枝

一読して（素に生きて）に惹かれた。辞書を引くと「素」は、「ありのまま。飾り気のないこと。」と書いてある。（素に生きて）には人生の諸々を削ぎ落したような爽やかさがある。この爽やかさは秋風というより初秋の風の感じだ。（身ほとり）という言葉の斡旋もよい。それぞれの言葉が融和して詩情を高めている。巻頭に相応しい佳句である。

喜寿といふ教へ子よりの夏見舞

眞保 勝江

今年も教え子から暑中見舞いが届いた。見るとなんと喜寿になったと書いてある。あの子がもう喜寿になったとは、と感慨深げな眞保さんである。ところで、作者の年齢は？と思わず投句用紙を見た。年齢欄には92歳とある。太めのサインペンで書かれた達筆の文字は美しい。文字からも作品からも居ずまいを正した暮しをされている様子が窺える。良き教師は何時までも教え子たちから慕われる。

朝顔のひとつひとつの朝の色

岡 美穂

朝顔が咲き始めると毎朝庭に出るのが楽しみになる。紅や白や紫や藍など、いま咲いたばかりの朝顔はどの色も涼やかで瑞々しい。朝顔の一つ一つの色に良き一日の始まりが感じられ爽やかな気分になる。

あらためて驚く馬齢終戦忌

高野 達子

馬齢とは自分の年齢を言う謙譲語である。馬齢を重ねるという成句があるが、ある年齢になると自然に出てくる言葉のように思う。終戦記念日にあらためて自分の年齢に驚くというのは戦争を体験した世代の人であろう。馬齢93歳、よくこの齢まで生きてきたものだとして作者自身感慨を深くしている。動乱の日々を生き抜き今こうして俳句を詠んでおられることは素晴らしい。

因みに、巻頭の醍醐さんは89歳、岡さんは90歳である。共々に年齢を超えて葉集の上位を飾っておられることにエールをおくりたい。取って年齢を公表させていただいた。

秋茄子誰はばからぬ暮しかな

鈴木美代子

秋茄子は実が締まっていてやわらかく美味しい。その美味しさは嫁に食わすというほどだ。美味しい秋茄子を誰に気兼ねをすることもなく食べられる暮しの気安さを詠みながら、どこか一抹の淋しさが感じられる。気を遣うことは気を